

琉球・臺灣の原始文化

河村 只雄

私は原始文化の研究に特に興味をもつて居るものであります。原始文化とか原始社會とか申しますと、いかにも現代社會から遠いことの様考へられ易いのであります。原始社會の研究こそは、人間社會の最も自然な姿を把握する上に、重要な意義を有するものであると私は考へて居ります。而して又、複雑な現代社會を發生的に研究いたしますことは、現代文化を理解するに最も肝要なことであり、又、ある意味に於て將來への大いなる推進力であると考へます。

更に又、原始文化の研究は東亞の新秩序建設といふ、皇國の大使命の上から、現實の問題といつたしましても、重大なる意義をもつものであります。と申しますのは、今や我が日本は西に、南に、或ひは北に國家的重大關心を有して居ります幾多の原始民族をもつて居

かれたとは全く異つた文化の姿を、つかみ得るのであります。

臺灣の蕃界にいたしましても、蕃人の生活の中に入つて之を観察いたしますならば、幾多興味津々たるものを、見出し得るのであります。今の私には臺灣の蕃地は、極めてなつかしみのある所でありますが、多くの人々には恐らく如何にも物騒な、今なほ首狩をやつて居る野蠻なところであり、秩序のない社會の様に想像されて居るのではないかと思ひます。

しかし乍ら、想像と現實との間には著しい違ひがあります。蕃地の中でもことに原始的な山奥の蕃地に行けば行くほど、タブー的社會統制によつて、社會秩序が嚴肅に保たれて居ります。蕃人等はかつては確かに、首狩もいたして居りました。併し、あの首狩にいたしたとしても、何も無闇やたらに人の首をとつたものではなくて、彼等の社會の宗教的規律に従ひ、部落の行動として首狩りを敢てして居たのであります。

また、性的關係にいたしましても、原始的な部落に行けば行くほど、嚴肅なものであります。しかし、所謂文化的になるほど、却つて、ルーズになつて居ります。唯物史觀の立場をとる一派の學者は、原始社會の性的關係

ります。これ等の原始民族を如何にして皇民化するかが、我々に課せられて居る大きな問題であります。從來の西洋流の植民政策といふ立場からでなく、彼等を最も自然に而も効果的に皇民化するために、先づ、我々は「原始社會」に對する認識を高めてはなりません。その意味におきまして「原始社會」の研究は特に重要なものであります。原始文化に對する正しい認識をもつて東亞の新しい天地に新秩序建設に邁進することが、我々のつとめであると思ひます。一昨年の天長節に私は臺灣のライブアンといふ最も原始的な蕃社を訪れましたが、そこには屋内埋葬と申しまして、家屋内に穴を掘つて埋葬する弊風が残つて居りました。屋内埋葬は、かつては一般に行はれて居りましたが、ライブアンのものはその最後のものであります。私は極めて

は亂雑極まるもので、亂婚状態であつたと主張したして居ります。そして、一夫一婦の家族といふものは、あとから出來た制度の様に考へて居りますが、臺灣の原始社會の實例は、かゝる假説を否定するものであります。私は蕃人の研究に於ても、家族といふものが人間社會に於ける最初からの社會單位でありまして、家族からの小氏族、大氏族、國家といつた發達をなしたものであることを、信ずるものであります。

家族のことを申しましたから、そのついでに臺灣・琉球で行はれて居ります子供本位呼稱法のことを申上げませう。臺灣の東側の海上で、丁度ヒリッピンに近寄つたところに、紅頭嶼といふ島があります。この島のものはまだお酒の味も、煙草の味も知らないといふ原始的な島であります。猿でさへ猿酒を作るといはれて居ります。世界中お酒の味も知らない原始人など、現在では紅頭嶼の蕃人以外には、恐らくないだらうと思ひます。

紅頭嶼の蕃人は之をヤミ族といつて居りますが、ヤミ族は酒も知らず、煙草もまなばかりか、我々の社會を脅して居るあの恐るべき結核もなければ、また梅毒もまだ侵入して居ないといふ原始的な種族であります。この島の蕃人は男は一年中禪だけ、女は腰巻の

平易に皇國の精神を説いてやり、遂にその弊風をやめさせることに成功いたしました。臺灣の蕃人が、一般的に今や急速に皇民化しつてありますことは、まことによろこばしい次第であります。私は他の東亞の諸民族も亦、彼等に對する十分なる認識をもつて、八紘一宇の皇國の大精神により、これを正しく指導いたしまするならば、必ずや皇民化するものであることを信じて疑ひませぬ。

ところで從來、原始社會に關する研究には、唯物史觀の立場から、極めて偏した見方が流行して居りました。琉球の研究にいたしましても、随分と間違つた報告や、誤解されやすい報告が從來なされて居ります。かゝる誤つた見解を是正すると共に、南の島の文化の眞の姿を闡明して、精神文化研究の一助たらしめたいとの念願から、健康には不幸にして極めて恵まれぬ私ではありますが、敢て、南方文化の探究にのり出した次第であります。

私はあくまで、具體的資料に基づいた研究の完成を熱望いたして居りますので、クリ舟や、帆船船などで隈なく島々を渡り歩き、資料の蒐集につとめて居ります。島人の社會に入り、彼等の生活の中に入つて、したたく島外の文化を観察いたしますならば、抽象的に描

外には僅かに乳房をかすため、袈裟の様なものをかけて居るだけあります。その袈裟の様なものも、我が領土になつてからやりだしたものの様であります。この最も原始的なヤミ族の間に、面白い子供本位呼稱法が行はれて居ります。

子供本位呼稱法とは、簡単に申しますと、夫婦の間に子供が生まれますと、部落のものがら夫婦がその本名で呼ばれないで、子供の父または母として呼ばれる習慣のことであります。例へて申しますと、太郎と花子といふ夫婦の間に、一郎といふ子供が出來たといつたしますと、部落のものは、もはや太郎さんとか花子さんとか呼ばないで「一郎のお父さん」、「一郎の母さん」といふ呼稱法を用ひるのであります。

紅頭嶼では「あなたのお名前は」と尋ねますと、一郎の父ですとか、一郎の母ですなどと大抵答へて居ります。子供のあるものに本名で呼びかけでもいたしますと、親たるの身分を無視したものであります。子供が全部死亡して居なくなると始めて、その本名に還元されるのであります。

かうした「子供本位呼稱法」は大同小異な形式で、琉球に於ても到るところに見出され

ます。

昨年の秋、調査にまゐりました奄美大島でも亦「子供本位呼稱法」がよく行はれて居ります。例へば、西古見といふ部落では大人は殆どその本名を忘れられ、子供の父、または母、或ひは祖父母として知られて居るほど「子供本位呼稱法」が徹底して居ります。かうした「子供本位呼稱法」が、原始的な社會に於て特に明瞭に見られます事實は、一體何を意味するものでありませうか。私はそれは家族本來の姿が親子中心のもの、夫婦中心のものでないことを、我々に教へてくれるものだと思います。新婚の夫婦の家庭に於きましては、普通お互の呼び方に始めのほどは微笑ましい苦勞をするものであります。夫は新妻を、オイ、チヨット、などと呼び、新妻は夫にネーナタなどときまり悪るさうに呼ぶ間でありまして、一度、子供が生まれますと、すぐ極めて自然にお互が、お父ちゃん、お母さん、と呼び合ふ様になり、家族内の呼稱法が全く子供本位になります。

現に、私の所でも、今年八十一になる老母が私のことを「お父さま」と呼んで居り、私も老母を「おばあさま」と呼んで居ります。私はこれは、「子供本位呼稱法」の面影を思ふか、或は何萬年前とかと外國の民俗學者はよく申しますが、石器時代にもピンからキリまでありまして、一概にそのやうに古代のものといふことは出来ないと思ひます。現に、紅頭嶼では石器と鐵器とを併用して居るのであります。

文化といふものは、ある一部の學者が主張いたして居ります様に、石器時代、銅の時代、鐵の時代といった風に、どこでも段階的に發展するものではなく、紅頭嶼の様に、支那・日本の鐵の文化との接觸によつて、銅の時代を経過せずに石器から鐵の時代にとゞこともありまして、極めて複雑な進展をなすものであります。

次に、原始文化の特質をよく理解して戴くために、琉球の最南方にありませう波照間といふ一孤島のことを御紹介申上げたいと思ひます。

我々の子供のとき、老人達が遠い所といふ意味を現はすために用ひて居りました言葉は、「唐・天竺」でありましたが、首里・那覇では「八重山・ハテルマ」といつて遠い意を現して居りますが、それ程波照間は不便なところでありませう。しかし又、それだけ多分に原始的なところが残存して居ります。私はこの波照間で原始社會の最も純眞な姿を見

ばしめるものだと思います。外國では子供が出来るやうが、出来まいが、そんなことには一向おかまひなく、お互呼び捨てに合つて居ります。妻君が主人公をジョイン、などと呼び捨てにして居りますのは、我々日本人にはどうも妙に感ぜられます。現在の外國の家族は夫婦中心のであつて、家族本來の姿から脱落して居ると私は考へるのであります。しかし、私共の家庭で子供本位呼稱法の面影が今尙残つて居ることは、我が國の家族が、家族本來の親子中心の姿をよく保持して居ることを、物語るものだと思います。この點に關しては尙色々面白い資料もありますが、残念ながら今は省略させて戴きます。

なほ、家族制度に關聯いたしまして、琉球の池間といふ島の結婚制度のことを御紹介申上げたいと思ひます。池間では、若い男女の間に縁談がととのひますと、男はその晩から女の方に通ひ始めるのであります。夕方行つて翌朝は我が家に歸つて常の如く仕事をするのであります。その内に子供が生まれるのであります。子供が一人二人出来た頃に、やつと自分の家をもつのであります。子供が三人位出来るまで、妻の所に通ふのは、決して珍しくありません。

中には子供が六七人も出来て孫が出来ると、た様な氣がいたしました。

一體に原始的な社會に行けば行くほど、全部落的なお祭りが多く、しかも、そのお祭りが又、丁寧に行はれて居ります。そして何をすることも、何を始めるにもすべてお祭りが伴なつて居ります。それは、祭政一致といふより、祭即政といつた方がよいかと思ひます。而して、波照間には、正にその面影がよく残つて居ります。

我が古典をひもときますと、上代に於ては、お酒はお米などを、かんで作つて居た様であります。お酒を作ることを「醸す」と申しますが、あの「醸す」といふ言葉は「かむ」から由來して居るといはれて居ります。ところが、波照間では昭和の今日でも尙、神様にお供へするお祭りの時のお神酒は嚙んで作つて居ります。お祭りの時には幾人かの乙女が選ばれて、齋戒沐浴して粟や米を嚙んで吐き出す役を、仰せつかるのであります。若い女の口からは、唾液の分泌量が豊富で、醗酵せしむるのに好都合なためでありませう。

琉球には我々が古事記・萬葉集にのみ窺ひ得る様な古語が多分に保存されて居ります。誰の歌でありましたか、ある人が琉球を旅しての感じを歌に現はして、かう歌つて居ります。

りになつて、やつと自分の家をもつたといふ、呑氣者もあつたといふことであります。女の子の家庭でも、敢てそれを不思議にも考へないらしいやうであります。これは社會學でいふ、所謂、母方居住制によく似たものであります。又、それは實に我が上代の結婚制度を思はせるものであることは、すこぶる興味ある事實であります。この事例は、池間のものが一番はつきりして居りますから、池間の例を申上げただけで、奄美群島や、トカラ列島でも到るところで見られるところのものであります。

次に、紅頭嶼のヤミ族の石器文化のことを一言させていたゞきます。私は紅頭嶼では面白い石斧が見つかると思ひました。番人に石斧を探して来てくれないかと頼みましたら、番人がそんなものを何にするかといひますので、私が珍しいからお土産にもつて歸りたいのだと申しますと、番人が更に申しますのは、

何！ お土産！ お土産になさるのなら、いゝのを作つてあげませう。

といひながら、庭にとび出して、石斧の制作にとりかゝり、しばらくの間に、立派な石斧を二つ作つてくれました。

石器時代といひますと、すぐ何千年前と目を開けて 時と所を 忘るれば 神代に近き 歴のきこゆる

これなどは、まことによく琉球の旅をよく歌つたものだと思います。波照間の如きは神代に近き色々なわざをも、亦見られるのであります。

とにかく、私は琉球・臺灣の原始文化の研究を通して、我が國文化に對する南からの文化的影響の一端を闡明することが出来ると信するものであります。また他方に於て、「ヤマト」の文化が遠き昔、南の島々に移植され、その後、交通不便のために幸に、今尙、昔ながらの姿を保持して居り、その研究を通して、我が國文化の古い姿を把握することが出来る、考へるものであります。これ等の點について、なほ申上げたいことも多々あります。他の機會にゆづり、今晚はこれで失禮いたします。御静聽を感謝いたします。

本講演に關聯して「南方文化の探究」並びに「原始社會」を参照される様望む(編輯)

(昭和十五年二月九日A.K.より放送) 講演者は國民精神文化研究所員

